Heroldo de HEL
N-ro25 jul-aŭg, 1988
北海道エスペラント連盟
００４札幌市白石区東札幌２条６丁目
尾田ビル２Ｆ中央オフィス学院気付け

第７５回日本エスペラント大会に寄せて

宮崎　公子

1988年の第75回日本エスペラント大会は北海道で開催されると知ったとき、私は20年前に伊東といっしょに行ったことをおもい出して、平常、不勉強な自分を反省し「カツ」を入れるためにも参加したいと考えていたが、他用と重なり行かれなくなったのは残念だ。

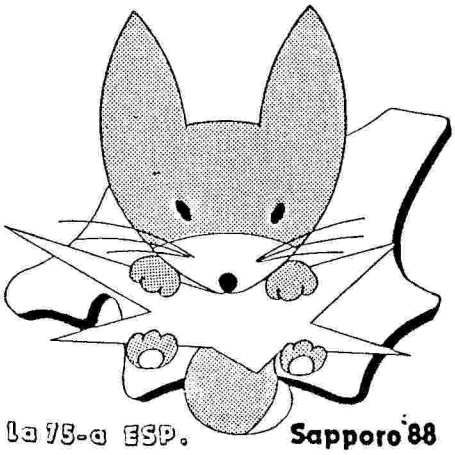
20年前、つまり1968年の第55回の大会のときは私にもぜひ同道するようにとすすめられて出かけた。この年の前半も伊東は原稿書きや平和運動、その合間はエスペラント研究会と多忙な日を送っていたが、北海道大会の「平和と人権」を旗印とした講演を引きうけたのも、彼らしいと思った。（さだかな記憶ではないので違っていたらお許しを願いたい）　常に純粋な人間性の追求ということを心がけ、相互的友愛、平等、正義を原則とする彼の生きざまは、時として人びとを酔わせもしたが、逆に迷惑もかけたにちがいない。この時の話がどのような成果をもたらしたのかということは私にはわからない。

だが、20年を経過した今日、世界大会で「平和の日」が堂々と大会の名でもたれ、いろいろな行事が催されるようになったのは喜ばしいことで、歴史は逆行していないことを証明している。

第50回エスペラント世界大会が東京で開かれた時、世界平和エスペラント運動（ＭＥＭ）日本支部に所属する会員等は会場の一隅でベトナム支援のための緑星旗への署名あつめをするために旗をひろげて参加者に訴えていた。この行動に対して当時の幹部は、エスペラントは中立だからこの行動はよろしくない、と没収してしまった。あの不正なアメリカのベトナムへの侵略戦争で多くの人民（この中には勿論エスペランチストもいた）が苦闘しているしていることに対して連帯の励ましがどうして悪いのか、私も判断に苦しむどころか憤りさえ持った。勿論、伊東も加わっての行動だったので、後年何回も返還交渉をし、やっと戻っては来たが、それは伊東がなくなった後のことである。

札幌で日本大会のあった翌年、1969年３月、大雪の降る中を寝台車に横たわって入院し、急性肺

SAPPORO FERVORE BONVENIGAS VIN !



炎で一週間後に息をひきとった。窓外の降りしきるぢーいっとみつめていたが、もうそのときは書きとめる気力もなかった。「やるだけのことはやってきた。今はさっぱりした気分だ」と、冷えゆく手で私の手のぬくもりを感じとりながら眼を閉じた。いつも口ぐせに云い、書いてきた Esperu kaj laboru！は彼の生涯の信条だったのである。

若い人びとを心から愛し育てることに情熱をかたむけた彼は、東京の中央労働学院で約10年の間若い人たちにエスペラントの学習を指導し、平和運動の一環としてメーデー、原水禁運動などにも若者と肩をならべて行動していた。エスペラント精神で平和の問題、教育、農村、児童の諸問題と取り組んできたことは彼の心を豊かにするに充分であっただろう。「心をこめてエスペラントを使おう！」 伊東は常にそう話していた。大会の成功を祈りつつ。

☆本誌N-ro 23 (88,marto)にＩ．Ｕ．氏（伊東三郎）の詩“Mateno en Sapporo ”を LEONTODO (69,februaro) から再録した（ LEONTODO は本来の北海道連盟機関誌で現在は休刊中）。この作品は20年前、札幌で開催された第55回日本大会の際Ｉ．Ｕ．氏が宿舎の北海道大学クラーク会館で故山賀勇博士（大会会長）に手渡したものである。

“Mateno en Sapporo ”は再録にあったて付された切替英雄氏の解説とともに、新旧世代にあらためて新鮮な反響をよびおこした。札幌Ｅ会青年部が機関誌名を“Mateno en Sapporo ”としたのはその一例である。

編集部はこの機会に東京在住のＩ．Ｕ．夫人・宮崎公子氏に本誌への寄稿をお願いしたところ快諾を得た。宮崎氏に感謝します。なお今回、若い読者の問い合せに応えて、『日本エスペラント運動人名小辞典』（田中貞美、峰芳隆、宮本正男共編）から伊東三郎の項を転載する。 (Kk)

いとう　さぶろう　伊東三郎　1902～69

Ｎ岡山市　Ａ本名宮崎巌、旧姓磯崎，筆名伊井迂、Ｉ．Ｕ．　Ｌ青山学院中退・大阪外語中退　26年労働農民党大阪府連合会書記長代理、28年国際文化研究所設立に参加．『農民闘争』を発刊，全国農民組合全国会議を結成共産党中央委員候補・農民部長など．32年，40年の検挙をへて戦後熊本県農村青年連盟を組織．挫折して東京へ．７歳（ママ）のときＥに興味をもち岡山中在学中学習，ただちに詩を書いた．青山学院・大阪外語Ｅ会で活動25年岩橋武夫の世話で大阪市立盲学校のＥ講師，永峰清秀らを教える．25年Ｅ青年同盟を創立．熊本でＥ運動．53年平凡社で『世界の子ども』の編集に参加．58年中央労働学院Ｅ講師．　Ｖレーニン『マルクス主義の三つの源泉と三つの構成部分』『プロレタリアＥ必携』『プロレタリアＥ講座』（共編）『日本Ｅ学事始』“ Verda parnaso ”『言語学』（大島義夫と共著）『児童問題』（野口昌夫と共著）『Ｅの父ザメンホフ』『ことばの歴史』『職業指導年鑑』『Ｅ教本』その他．

Ｂ渋谷定輔・埴谷雄高・守屋典郎『高く　たかく　遠くの方へ』その他．

（注）Ｎ出生地．Ａ本名，筆名，別名など．Ｌ学歴．Ｖ著訳書．Ｂ参考文献．

田中貞美、峰芳隆、宮本正男共編の労作

日本エスペラント運動人名小辞典

大阪、’84年刊、新書版 120p.、定価 700円

日本Ｅ運動に貢献のあった人びと 500名余を収録。ただし物故者のみ。注文はもよりの書店へ。発行所は日本Ｅ学会と指定のこと。

Ｉ．Ｕ．と北海道での日本大会

苫小牧　星田　淳

N-ro 23 の１頁に出た Mateno en Sapporo は、20年前の札幌での第55回日本大会（'68年８月３～５日）に来たＩ．Ｕ．の札幌での作品だった。このエスペラント詩人、別のplumnomo伊東三郎でもよく知られているが本名は宮崎巌である。この詩は、彼が札幌で泊ったクラーク会館での朝の印象を描いたものだ。東京に帰ったあと、D-ro 山賀への大会の成功を喜ぶ手紙の中に「大会期間中みなさま方と深く語り合う機会が欲しかったのですが、宿舎が旧友の好意で大学構内のクラーク記念館で門限が早いため多くの方々と夜話しこむ便宜を取り逃がし残念でした」とのべている。

この頃は'65年東京での第50回世界大会での盛り上がりが次第に静まって来た時期。しかし米軍のベトナム介入に対する反戦運動が高まる中で、samideano 由比忠之進が'67年11月首相官邸前で抗議の焼身を決行、再びエスペラントが世の注目を浴びるようになっていた。この頃Ｉ．Ｕ．の心の中にわだかまっていたのは、ESP-ISTOJ が自分たちだけの趣味グループとして社会から遊離し、世界の動きから取り残されて行くのではないかという危惧だったようだ。戦前からの社会活動家で常に未来に目を向けていた彼としては気になることだった。

"・・・Mi sentas urĝan neceson reĝustigi la direkton de Esperanta movado, de plezura amuzo al serioza laboro. Mi esperas freŝan revivigon de nova juna esperanto-movado. En tiu senco, mi multon atendas de fervoraj klopodoj de samideanoj en Hokkajdo・・・" と彼は D-ro 山賀（当時・日本大会組織委員長）に書いている。

北海道側でも、日本大会の際 esp-istojの親睦だけでなく対外的な宣伝になる行事をやりたいとの希望が D-ro 山賀ほかから出ていた。ちょうど国連人権年にあたった'68年、「平和と人権」についてのシンポジウムを、とのＩ．Ｕ．の提案は若干の曲折を経て実現することになった。第１日の大会大学（エスペラントによる学術講演）は、

エスペラントと国際社会　伊東三郎＝Ｉ．Ｕ．

固体物理学の現在の進歩　宮原将平

によって行われた。

「人権の年」記念行事として行われた「平和と人権のためのシンポジウム」は時間の都合で閉会式のあとになったが、

「キリスト者と平和運動（恵庭事件にとりくんで）」を橋本左内氏（牧師）が、つづいて

「政治亡命者に対する庇護権」を吉原正八郎氏（ＳＥＳ会長）が報告した。この催しのかげの提案者、企画者だったＩ．Ｕ．の名はどこにも出ていない。

彼のこの大会への思い入れの底には、その前の機会 ── 1936年の第24回日本大会の記憶があった。その時は彼の当時の本名、磯崎巌で参加している。その記憶を彼はこう書いている。

"・・・Mi tre kare rememoras la 24-an Kongreson en Sapporo, 1936, en kiu mi partoprenis akompanante ĉinan kamaradon kaj portante salutleteron de K-do Akita Uĵaku. Tio estis en grava momento en situacio antaŭ Ⅱ-a mondmilito." (D-ro山賀宛 1968.01.10 、前出の断片も同じ)

この52年前の、札幌で行われた最初の日本大会で、彼は文芸分科会を代表して報告、また３件の提案を出し可決されている。

（最終１２ｐ．につづく）

伊東先生から学んだ頃のこと

札幌　　水上　侑子

小学校の教科書で国際共通語のエスペラントを考案したザメンホフのことを習い、その考え方に感動したことを今も覚えていますが、実際にエスペラントに接したのは幼児教育の現場に入ってからで、社会科学に関する勉強をしているときでした。そこは中央労働学院のエスペラント・サークルといって、週に１回あつまってエスペラントを学習していました。

昼は働いて、夜間学ぶという生活なので、授業終了後のかなり遅い時間の活動でしたが、中労ロンドの人たちは伊東三郎先生を講師に迎え熱心に学んでいました。伊東先生は長身で痩身、おだやかでやさしい人柄の方で、御自身の作られたテキストを使って御指導くださいました。

挨拶の言葉を覚え、歌を習ってうたい、心から楽しい時を過ごしたことを思い出します。限られた時間でしたが、伊東先生の話すエスペラントの素晴らしさに敬意をもっておりましたが、先生は私が計り知れない位の信念をもって語っておられたのだと思っております。

後年、新聞の読者投書コーナーの中に伊東先生のお名前を発見しました。当時は高校生の非行のニュースが多い時代でしたが、先生が道内旅行中に親切にしてくれた高校生に「ありがとう」と紙上でお礼のことばを述べておられる文章で、先生らしいと懐しく読んだことも思い出しました。

今年の全国大会は札幌で開催されます。大会には初めて参加しますが、中労時代の仲間に再開できるだろうか、とかすかに期待している私です。そして、伊東先生のお話を聞かせて下さる方にお逢いしたいと願っています。

★日本エスペラント学事始　（伊東三郎著）
　横浜　’32刊、’77復刻、229p、 900円
★エスペラントの父　ザメンホフ
　（伊東三郎著）　岩波新書
　’51刊、’84特装版、236p、 800円
★新版・反体制エスペラント運動史
　（大島義夫・宮本正男共著）　三省堂
　’87刊、390p、2200円

＊　＊　＊　＊

連盟では書籍の取次ぎはしていません。ご注文はもよりの書店へ。岩波、三省堂以外の書籍は日本E学会発行と指定してください。

第５２回北海道エスペラント大会

標記の大会を下記により開催するので多数の参加を期待する。

第５２回北海道エスペラント大会開催要領

１．開催日時　８８年８月２１日（日）　午前９時～１０時
２．開催場所　札幌市北区北６条西７丁目　北海道自治労会館
３．参加費　無　料　（但し、ＨＥＬの会費を徴収する）
４．その他　①本年は、第５１回大会終了後札幌エスペラント会が第７５回日本エスペラント大会の招致を決定し、実行団体になったため、ＨＥＬの大会の１ヶ月繰り上げ開催を役員会で決定した。
②日本大会の開催中であるから、議案は予算、決算、役員人事等限られたものになる予定。　（北海道エスペラント連盟事務局）

第７５回日本エスペラント大会

La 75-a Kongreso de Japanaj Esperantistoj
Sapporo, 1988-08-20/21

ひらこう新世紀みどりの大地に！

日本のエスペラント運動はいま新世紀への道をわが北海道のみどりの大地から踏みだそうとしている。さわやかな札幌の夏風をうけて、たしかな足どりで踏みだそうとしている。

まもなく札幌、北海道はもとより全国のエスペラント組織、個人の協同と英知で準備されてきた第７５回日本エスペラント大会が幕を開ける。

札幌はもろ手を挙げてすべての参加者に歓迎のあいさつをおくる。そして、会場に姿がなくとも心は札幌にあるすべての人びとに感謝のあいさつをおくる。

大会参加申し込み４３０名越す

８月１５日までに参加申し込み（不在参加を含む）は４３０名を越えた。外国からの参加も韓国中国、フランス、ユーゴスラビア、ブラジル、ニュージーランドから。外国人と話す会や公開番組で外国人参加者登場があったり、国際性いっぱいの大会になる。詳細はKongresa Libroで。

第５２回道大会は２１日の午前

今年の道大会は２日目の午前、自治労会館で開催されるが、日本大会中なので最少限の必要事項のみ協議、決定するだけになりそう。

大　会　プ　ロ　グ　ラ　ム

第　１　日	８月２０日（土）
9:00 ～10:00 10:00 ～12:00	★受付け開始　★大会協議会 ★(FK)ＪＥＩ会員総会 ★外国人E-istoと語る会 ★Ｅで楽しく歌う会
12:00 ～13:00 13:00 ～14:00 14:15 ～15:15 14:15 ～16:45 15:30 ～16:45	★昼　食・休　憩・自由交流 ★開　会　式 ★大会大学Ａ ☆(FK)Revuo Orienta 読者の会 ☆講座・Ｅ会話独習法 ★(FK)ＪＥＩ研究発表会 ★体験交流会・姉妹都市交流 ☆講座・Ｅの歌の訳し方 ☆(FK)ＥＶＡ女性の会 ☆(FK)ＪＥＬＥ教育者の会 ☆一般対象・Ｅ半日速成講習Ａ ★大会大学Ｂ ☆外国人との会話の会Ａ
17:20 18:00 ～19:30 19:40	★GAJA VESPERO行バス出発 GAJA VESPERO　en Suntoriejo バス出発　大通公園経由★まで

第　２　日	８月２１日（日）
9:00 ～10:15 9:00 ～11:45 10:30 ～11:45	★(FK)第52回北海道Ｅ大会 ★討論会・Ｅの文化とは何か ☆(FK)ＥＫＡＲＯＪ無線の会 ☆(FK)科学者・医学者の会 ☆講座・楽しい文通法 ★フォーラム・地域に根ざした運動を築くために ☆一般対象・Ｅ半日速成講習Ｂ ☆ＪＥＩ学力検定試験 ★(FK)世界大会報告会等 ★公開講演会・脳の老化防止に語学――なぜ効果があるのか ☆(FK)「Ｅの世界」読者の会 ☆(FK)仏教の会 ☆外国人との会話の会Ｂ
12:00 ～12:30 12:30 ～	★閉　会　式 ★昼　食・休　憩・自由交流
13:30 ～15:45	★公　開　番　組 影絵劇　外国人参加者の話 高校生の演劇

プログラム中の★は第１会場・自治労会館、☆はクリスチャン・センター、(FK)は分科会を示す。

スイスから来た
Jacueline GEHRIC
26aĝa, iomete dika, 158cm alta

札幌　木村喜壬治

彼女は5月に来日、亀岡で行なわれた１５日間のエスペラント文化ゼミナーに参加の後、中国・九州を廻って、６月１９日札幌着。金森美子、児玉広夫、木村が出迎えて北海道開拓記念館へ案内、雑談しながらの説明、いつものことながら主役は児玉さんにやってもらう。頃合いをみてはs-ino金森が種々質問をする、そしてみんなの会話がはずむ。しかし、客を迎えていつも反省させられるのは、parol-kapablo の不足である。第１日目は児玉宅へ。

２日目は s-ro 高橋要一と３人でＴＶ塔に上がった後、札幌芸術の森へ案内。緑したたる空気を吸いながらの楽しいpikniko であったが、５０余の芸術作品の多くが抽象像であるために、解説書のtraduko にまたひと苦労、辞書を引きながら、相談しながら。そして夕食会へバトンタッチ。

２日間のamikeco で、いろいろたくさん話し合ったのにさっぱり思い出せない。古くて新しいスイスのnovaĵoj をいくつか。

四国くらいのの大きさの国スイス。仏、独、伊の３ヵ国語が公用語、今のところ一本化の見通しはない。

国連には加盟しない（数年前の国民投票で再び加盟が否決された）。

学校は小学校が４年、中高校が５年、併せて９年が義務教育。さらに上級学校へ進む者は２０～３０％にすぎない。

小学校に入ると公用語３つを学ぶのではなく、その所属する言語圏のことばを学習する（仏語圏属なら仏語で学習する）。

辞書を手に札幌駅でボンベーノン
　　てらいなければとちり気にせず

苫小牧での
Jacueline GEHRIC

苫小牧　星田　淳

６月２２日１０時２４分、札幌から苫小牧着。「ちょっと顔を見せてくれ」といわれていたので、出迎えの梅木孝昭、星田と苫小牧民報社へ。このインタビューが６月２３日の記事（別掲）になった。昼食（ヴァンカム）の後、梅木の車で白老ポロトコタンのアイヌ民族博物館へ。　La Chaux de Fonds の Kultura Centro Esp-ista, Johan Valanoと Balano （周知の同一人物）のこと、彼女がＥを習った Olivier Tzaut の話など面白かった。

苫小牧にもどり「やきとりの一文」で歓迎会。他の古いメンバーや家族も加わり歓談。海のないスイスでは、イカ、タコ、カニは余り食べないとか。どうも不得手らしいが、その姿の見えぬ焼き肉や日本酒は好みに合ったらしい。星田宅に泊まり、翌日は王子製紙工場を見学、１２時２４分の北斗８号で函館経由、盛岡へ向かった。

相沢顧問大会出席へ

一昨年12月から入院療養中の連盟顧問・相沢治雄氏を７月末、星田淳と編集部のカワハラが入院先（札幌市西区二十四軒4-2-8 西村病院）に訪ねた。相沢氏は相当健康を回復され、ベッドに腰かけて二人を迎え、歓談した。

「視力は少し落ちたものの、あとは回復してきた。糖尿には歩くのが一番いい、歩くようにしている」「今はこれまでの道大会の録音テープを聞いて、編集を考えている」との近況を語り、また「われわれがエスペラントを始めた頃はイドやヴォラピュクなども盛んで将来が不安だったが、今となってはエスペラントは不滅だ」と健在ぶりを示した。日本大会には外出して参加するとのことで、久々の相沢氏登場の会合になる。

昨年から今年にかけて日本に滞在したフランス人の ROBINEAU 夫妻（Bruno さんと Maryvonneさん）から由仁の新田為男氏あてに手紙がきた。夫妻は昨年１０月、北海道を訪れ札幌を経て新田氏宅に１泊し、由仁近辺の牧場で生活したのち、苫小牧に向かった。発信地は韓国・ソウル。手紙にはフランス人から見た韓国事情や青年エスペランチストへの批評なども見られる。　（編）

Seoulo, 15.05.88

Jam longa tempo pasis ekde kiam ni vizitis vin kaj eble vi pensas ke ni forgesis vin. Tute ne,sed tempo fulrapide pasas kiam oni mondvojaĝas!

Ni forlasis Japanion komence de Marto. Jam du monatoj en Koreio. Rigardante Malproksiman-Orienton el Eŭropo, ni facile opinias ke ĉiuj popoloj en tiu parto de la mondo estas pli aŭ malpli samaj. Kia eraro! "Ĉiu popolo havas sian lokon en la bukedo de la Homaro", tion oni lernas mondvojaĝante.

Ĉi tie ni renkontis Koreojn varmaj, spontanaj, tiom energiaj. Vivo eksplodas: svarmas la ridetantaj infanoj, oni detruas kaj rekonstruas domojn, vojojn, oni laboregas, ĉio moviĝas, antaŭeniras. Sed restas ankoraŭ malfacilaj labor- kaj vivkondiĉoj por multaj homoj, demokratio ne ĉiam glate iras, virinoj suferas multajn malvantaĝojn... Moderna lando konstruiĝas iom post iom, ne sen malfacilaĵoj.

Ni ĝuis ankaŭ la belajn tradiciojn: koloraj dancoj, buntaj virinaj kostumoj ankoraŭ ofte videblaj sur strato, belegaj pentritaj temploj kaŝitaj en montaro, palacoj... Kaj ni havis ŝancon vidi la eksplodon de printempo: varmo subite alvenis, ĉerizarboj vestiĝis per blankaj roboj, tuta naturo verdiĝis, kamparanoj aktive laboris la teron post la longa vintra dormado.

Kaj pri Esperanto? Ni tuj estis ravitaj de la multnombraj junuloj kiuj interesiĝas pri Esperanto kaj vigle parolas pri Esperantismo. Idealismo estas granda sed...reale oni devas rekoni ke la nivelo de lingvoscio estas sufiĉe malalta aparte de kelkaj bonegaj Esperantistoj.

La fakto Esperanto estas ankoraŭ plej ofte ne konata de ĝenerala publiko. Do ni propagandis pri ĝi, donante intervuojn al ĵurnaloj, radio,televizioj, prezentante nian vojaĝon kaj la uzeblecoj de Esperanto en diversaj Universitatoj. Ni semas...

Ni ŝatus longe resti en tiu lando sed vizo baldaŭ finiĝos kaj ni devas foriri. Leĝoj ne ĉiam akordiĝas kun deziro de mondvojaĝanto kiu havas tempon kaj deziron malkovri! Tamen ni volas konsili tutkore al vi ĉiuj: "Vizitu vian najbaron, Koreio, kaj vi certe estos ĉarmitaj".

Ni ofte pensas pri Japanio kaj sincere dankas al vi ĉiuj kiuj tiom bone akceptis nin, helpis nin malkovri vian landon.

Sincerajn dankojn al vi ĉiuj kaj Ĝis Revido!

PS:

Vi estos ĉiam bone akceptataj en nia hejmo sed atendu iom, almenaŭ... tri jarojn por ke ni havu tempon fini nian vojaĝon.

Ni kore dankas vin pro la senditaj fotoj, kiuj estas ĉiam bonaj memoraĵoj pri nia restado ĉe vi. Ni esperas ke vi kaj via edzino bone fartas.

第７３回ＵＫ（ロッテルダム）に参加して

札幌　馬場恵美子

７月２２日、成田から今年の世界大会開催国オランダへ飛び立ちました。札幌の瀬川綾子さん、山岸悦子さんという、最近のＵＫの常連も同じ便で出発しました。私は同じＪＥＩカラバーノでも大会参加のみのコースで７月３１日には帰国、彼女たちはアルクマールへの大会後観光にも参加して８月７日に帰国するコースでした。

オランダ・スキポール空港からバスで１時間、ついに初めて訪れる街、ロッテルダムに到着。この街に滞在中はほとんど三人で行動をともにしました。この三人に、私と同室だった糟谷道（かすや・みち）さんも加わって、楽しい旅になりました。

宿はロッテルダム・ヒルトン。大会会場となったドゥレーン会議場までは歩いて５分くらいの距離です。しかしながら……しかしながら私はほとんどといってよいほど大会会場には足を向けなかったのです。もっぱら観光と自己休暇の世界大会となってしまいました。北海道のエスペランティトのみなさま、すみません！

私のわかっている範囲では大会参加申し込み者は62ヵ国から 3,179人。期間中は人形劇、映画、オランダ語講座、ジャズと、まだまだたくさんのプログラムが組まれたホールでは楽しいおしゃべりが夜中まで続いていました。この季節のオランダは午後９時を過ぎても明るく、ちょうどトワイライトといった夜が続き、気がついたらもう１０時だったということも何度もありました。

開会式ではスイスの f-ino Badoux に再会してふたりでとびあがって喜びあいました。ルクセンブルグの s-ino Kohl とはホテルで再会。お孫さんを連れての参加です。元教師の彼女は何ヵ国も話すことができ、ペキン大会の大会遠足ではガイドが英語しか話せないとわかると、機転をきかせてガイドの英語を私たちに訳してくれたことを思い出します。

それから忘れてはいけないのは、イスラエルの s-ro Brahaです。私の顔を見つけるなり、 monto da kisoj 。あいかわらず上達しない私のエスペラントをものともせずに、どーんと話しかけてきます。“君のところでは雪が降るんだって？　雪が見たいよ”。札幌雪まつりの写真を送ることを約束しました。彼は閉会式を待たずしてフランスに渡ったようです。S-ino Kohl も s-ro Braha も来年のブライトン大会に参加するということで再々会を約束して別れました。

私にとっては最初の西ヨーロッパでの世界大会参加（ロッテルダムはペキン、ワルシャワに次いで３年連続３回目）なので、平均的日本女性の海外旅行なみに買物の楽しいこと楽しいこと。７月はバーゲン月でほとんどの商品が 50%off で、皮製品やセーターも驚くほどの値で買うことができるのです。デルフト焼の美しい青、素朴な木靴など帰りの荷物は旅行カバンに収まりきらないほど増えてゆきました。

オランダといえば運河と水車。大会全日遠足はアムステルダム観光をえらびました。船に乗って運河めぐりです。寒くなったり、暑くなったり、１日のうちでも気温は目まぐるしく変化します。そんな遠足の途中に立寄った国立美術館ではレンブラントの『夜警』にしばし言葉を失いました。また美術の教科書でしか見たことのなかったフェルメールの作品などで、あらためてこの国の文化と歴史を知らされました。

大会遠足とは別にベルギーにも足をのばし、ブリュッセルのエスペランティストの家に１泊しま

した。S-ino Yoland Steyaent の家族は犬が２匹と猫が２匹、御主人はロッテルダム大会に参加中で彼女も大会後観光には追いかけて行くとのことです。ところで、その飼犬の名は Espero 。EsperoはEsperanto がわかるのです。 S-ino が "Venu! Venu! Espero! Ĉe mi!" と呼ぶとぐんぐんしっぽを振って跳んできます。私も Espero を呼んでみました。オランダとは昔から縁の深い日本からやってきた esperantistino に Espero も大感激（？）してくれました。

ここでは、ふつうのブリュッセル市民の生活を体験しました。朝食のおいしかったこと！ この時期はバカンスで商店なども休業中なので、わざわざ私たちのために遠くの食料品店までパンとチーズを買いに行ってくれました。パン、チーズ、ジャム、チョコレートクリーム、コーヒー、ジュース。なにも変わったものが食卓に並んだわけではありません。でも、とても美味しいのです。楽しいのです。普通に何も飾らず自分の生活を見せるということを難しく考えすぎている私には響くものがありました。

来年はイギリス・ブライトンで世界大会が開催されます。私の大会申し込み番号は７１番です。私としては１０日間の海外旅行が体力的限界と思っていますが、きょう札幌に帰ってきた瀬川さんから電話で、大会後観光はもっともっと楽しかったと聞かされると羨ましくなって、来年はもっと休みをとって……などと考えたりもします。

時間は最近、私のまわりでは加速して進んでいるようです。気がつくともう7月、さあ出発の準備をしなくちゃ、ということに来年もなりそうです。またこれから１年ガンバルゾー。

(88-08-07)

苫小牧民報　88－06－23，6p．参照

エスペラントがとりもつ縁

スイスからゲーリックさん来苫

苫小牧エスペラント協会（星田浮代表）へ、海外からの旅行者が訪問してくるのが目立っている。エスペラントがとりもつ縁で訪れるもので二十二日にもスイスから民族問題に関心のある二十六歳の女性が単身来苫、苫小牧の会員の案内で白老町のポロトコタンなど見学した。

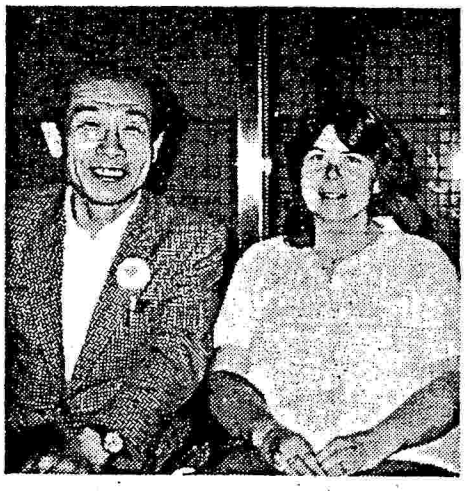
エスペラントを通じて世界中のエスペランチストが日ごろ文通などで交流を深めているが、世界を旅行する時に便利な共通語として最近人気が上昇し、旅行好きの若者たちにも関心を持たれている。

苫小牧エスペラント協会を訪れた外国人は今年すでに四人。

二十二日スイスから訪れたジャクリーヌ・ゲーリックさんはスイス北西部の町ニユシャテルから。日本のエスペランチストを頼って初めての来日。

スイスは多国語を話す国際的な国。ドイツ語六五％、フランス語二六％、イタリア語一五％、ロマンシュ系が少しという内訳で、ゲーリックさんは民族問題に関心を持っての来日。

星田苫小牧エスペラント協会代表は「エスペラントで世界の人と交流出来、国際問題の〝通〟になれます」と訪日する〝友人〟のガイド役に追われていた。



来苫したジャクリーヌさん（右）と星田さん

Tramo Nomata "Ondo de Paco"

IWAI Masahisa (Hakodate)

"Aenton, mi petas!" kantas la parolo de S-ro Hurudate por la tramaj pasaĝeroj, "Baldaŭ ni venos al la stacio Zyuuzigai. Tiu ĉi tramo nomiĝas 'Ondo de Paco'. Hodiaŭ la 24a de oktobro estas la tago, en kiu ni kune kaj unuanime efektivigas internacian komunan agadon por elimino de nuklearmiloj. "Ondo de Paco" rondiras dum 24 horoj ekde la tagmezo de la japana tempo kun Hirosima kaj Nagasaki kiel deirpunkto. En nia urbo Hakodate oni luprenis tiun ĉi tramon per komuna konto de 15 organizoj. Je la tagmezo la tramo startis de Yunokawa, kaj kuradas 6 horojn je 8-fojoj iro-reiroj por senpaga veturado de la publiko. Ĉiuj pasaĝeroj estas petataj rigardi bildojn de atombombado ekspoziciatajn en la vagono, kaj ankaŭ subskribi subtene al la apelo el Hirosima kaj Nagasaki. Ni elkore petas viajn kunlaborojn."

Sonis tintiloj kaj skuiĝis la vagono.

Estis frua vintro surstrate. Nia tramo "Ondo de Paco" kuris serene transportante pacdeziron. Estinte profesia konduktoro de Nacia Fervojo, S-ro Hurudate parolis en aŭtentika tono. Lia bona rivalo estis s-ro Tokunaga, kiu, parolante kun forturnita vizaĝo, akiris altan renomon de la pasaĝeroj per sia ĉarma basa voĉo. Ĉiam pli vigliĝis atmosfero ĝis la vera konduktoro fariĝis tiel simpatia kiel krii, "Tiu ĉi tramo estas Ondo de Paco, senpage uzebla por ĉiuj."

En tiu tago la urbo Hakodate esprimis sian aprobon pri la historia internacia komuna agado. La reprezentanto de la urbo kure venis por kuraĝigi nin kun mil folioj da Deklaro de Paco-Urbo por disdonado al la pasaĝeroj. Ĉiuj pasaĝeroj atente legis la deklaron, la subskribilojn kaj belajn flugfoliojn de la plenumkomitato, sur kiuj estis presitaj interalie ankaŭ pac-kvizoj preparitaj speciale de la Pac-Komitato Hakodate. Oni rigardis la panelojn de atombombado, kaj informiĝis pri la apelacio. Subskribiloj migris de mano al mano. Regis atmosfero de simpatio. Kiel kuraĝige estas por ni konstati, ke ĉiuj kunlaboras, se ili komprenas! En la fino eĉ elĉerpiĝis preparitaj de ni mil folioj da subskribiloj. Lau mia kalkulo nia tramo devis esti paroltemo de la hejmoj de 1300 pasaĝeroj tiuvespere.

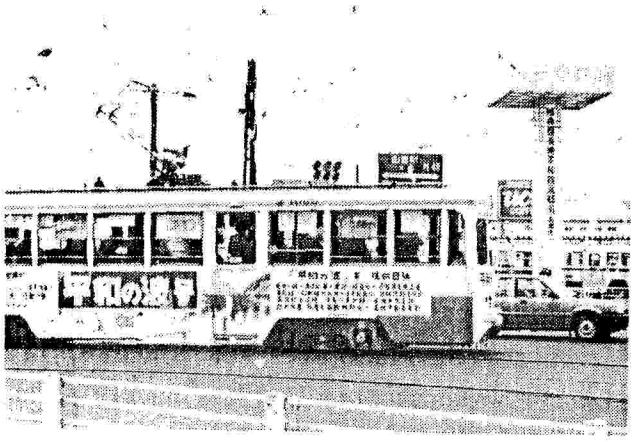
Granda ondo de paco lavis la havenurbon Hakodate. La tutan tagon varmigis mian bruston substanca emocio. Rimarkindaj estis la energia klopodado de membroj de Pac-Komitato Hakodate, kiuj ludis konduktorojn, kolektis subskribojn, faris vidvendon pri la agado k.a. en la tuta procedo. Dankon al ĉiuj partoprenantoj pro iliaj diversformaj kunlaboroj! Post la tuta laboro ni havis tempon rigardi ĵus bakitan vidvendon ĉe s-ro Tokunaga (Ĝenerala Sekretario de Pac-Komitato Hakodate). Ni taksis ĝin kiel internacie fierindan grandan verkon, kaj emocie tostis pro la solidareco kun la popolo de la mondo.

Nia imago flugis kun la ondo de paco tra la mondo. Kiel plezure por ni okupiĝi pri pacmovado entute! Ĉio, pri kio ni revis kiel infano, realiĝadas en la movado. Se vi ne povas donaci milionon da rozoj al via amanto, vi ja povas donaci kolorriĉajn pacflorojn al preterpasantoj. Vi povas ŝvebigi buntajn balonojn en la aero. Vi povas veturigi tramon de paco. Vi povas enfermi vian revon en boteletoj por drivigi ilin en la maro. Kaj fine vi povas neniigi nukleajn armilojn per la volo de biliono da subskriboj, per la herboradika forto de la popolo.

Ĉu vi ne sentas en vi ŝvelantan esperon? Ni kolektu unuopajn dezirojn por krei novan pacmovadon.

Karaj pacamikoj en la mondo, gratulon al la ondo de paco!

(el PACO '88 eldonita de Japana Pacdefenda Esperantista Asocio/ Japana Sekcio de MEM. Ĉi tiun tekston reviziis KURITA Kimiaki.)



Tramo Nomata Ondo De Paco

"Tramo Nomata 'Ondo de Paco'"は昨年11月、函館の平和団体が市電『平和の波』号を走らせ、核兵器廃絶の「ヒロシマ・ナガサキからのアピール」賛同署名をよびかけた「平和の波」第一波行動のリポートです。

この『平和の波』号運行にたずさわった岩井正久氏が平和新聞・函館版から翻訳しPACO日本版（世界平和エスペランチスト運動機関誌、88年5月発行）に掲載されました。岩井氏の了解を得て転載します。

（編）

（3p．からのつづき）

たしかにこの年は、彼の手紙にもあるように、grava momento だった。彼の記憶にある「なつかしく、愉快な」大会は、戦前ではここまでだったかもしれない。翌年（’３７年）７月７日、日中戦争勃発。偶然その翌日、７月８日旭川で予定されていた北海道大会は、不明の事情により中止された（２〜３日前、速達郵便が来て、事情あり大会を中止する・・・この手紙は読み終ったら焼却してほしい、とのことであった。――― 相沢治雄編、北海道エスペラント運動史・第２部）。これから日本は’４５年の敗戦までの戦争に入り、Esp.運動も権力の弾圧で遂に何も出来なくなったのだが。

Ｉ．Ｕ．または伊東三郎、本名宮崎巌は1968年７月３１日夜、夫人とF-ino 川上民子を同伴、上野出発。途中、弘前に寄って８月２日札幌着、北大の旧友・内海庫一郎氏の世話でクラーク会館に宿泊。大会終了後、農民が軍事演習に抗議して自衛隊の電話線を切断した恵庭事件の現地を訪問した後、帰京。この後、星田へのハガキでは“Las-tatempe mi forte sentas mian aĝon”と体の衰えを訴える。翌’69年３月７日、肺炎で死去。

★ＥＳＰＥＲＡＮＴＯ　Ｔシャツを着よう！

好評を博したトレーナーに続く第２弾。日本大会・道大会を記念して新発売、いまなら特価1500円。ＬＭＳ各サイズがあるので、あなたでもピッタリ。会場でおもとめ下さい。

販売　阿部商会（札幌・阿部映子）

Kantoj Karmemoraj 小西岳編・KLEG刊行の歌集。53曲収録・全楽譜つき。なんと正誤表までついて 900円。Ｅで歌う会会場で販売。

SALATO

★アイヌ語研究雑誌『ウエネウサラ』創刊号（1987. 11）に切替英雄氏のＥ文の論文　“DERIVAJ VERBOJ DE LA AINA LINGVO”が。なかみは読んでないから紹介できない。体裁Ｂ５で２７ページを占める。「ウエネウサラ」とはアイヌ語で「歓談する」の意味。同誌は現在３号まで発行されている。切替氏は北海道大学文学部言語学教室助手。問合せは、〒 047小樽市入舟2-17-12 同氏まで。

★Revuo Orienta の Intermezeを編集している石井義章氏から「PC-VANエスペラントＳＩＧ？？」（その１）の掲載依頼がきている。内容は「パソコン・ワープロを始めるためには」「通信機能付ワープロ一覧表」。今回も紙面の都合で紹介できなかったので、関心のある方は直接といあわせてほしい。〒 270-13 千葉県印旛郡印西町内野1-4-1-507 の同氏へ。

★やはりリブロテーコ東京からのアイスランドの絵本『ひいおじいちゃんと泥んこケーキ』（Ｒ．バルドルソン、大山沙理訳、Ｅ／日版、 900円）の紹介もできなかった。こちらは大会会場で実物を手にすることができる。とにかく大会では本をメいっぱい買おう。めったにない機会だ。

★ＳＥＳ青年部Mateno en Sapporo 速報版-Ido-は「編集人の、あきっぽく　へそまがりで　いじけた性格が災いして」休刊中（Mateno本誌３号より）。そりゃあ、たしかにそうだけど、雨ニモマケズ続けてほしい。Heroldo だって似たようなのが夜な夜なワープロ打ってんだから。（金井朗）

☆Heroldo de HEL　n-ro 25 (1988 jul-aŭg)
北海道Ｅ連盟機関誌　隔月刊　年会費2000円
（振替口座　小樽 17075）　購読者も同額